

北 どころ

第47号 2020年2月1日（毎月1日発行）

旧三上郡三十三か所霊場 ⑭ ふるちの巡礼地を訪ねて

第三十一番札所 庄原庄源庵

尋ね来し永江の庄のみなもと
のゆかりも深く道に入らばや
（たどりついたこの場所は永江
の庄ができた場所、仏法と
の縁も深く、これからも信仰
の道を歩んでください。）

三十六年前に書かれた「旧
三上郡三十三か所霊場探訪記
（以下、「探訪記」と略称）にも、
庄源庵の場所確認にかなりの
時間を費やしたと書かれてい
る。

「文政七年（一八二四）七月、
当時の庄屋板倉甚兵等が書い
た「国郡志御用村内相しらべ
図面調差上申候」という地図
を見ると、新道の北裏に『正



◀ 芭蕉の句碑(宝蔵寺)



源庵』と庵寺らしきものの書
き込みがある。それが庄源庵
ではないかと思われた。これ
を手がかりに、このあたりを
聞き歩いたところ、庄源庵跡
をつきとめることができた。

庄源庵は元庄原ホテル（現、
松島ストア）下の道を、西へ
約五十メートルばかり入った
三上宅の場所にあったことが
判明した。この辺から三玉宅
あたりまでが「庄源庵」とい
う地名で番地がつけられてい
る。旧広島街道（往還）は現

在の新道の家並のすぐ裏手を
通って、元広島銀行庄原支店
と辻本玩具店の境あたりに
まっ直に通じ、金福小路へと
続いていた。したがって、往
時の庄源庵の跡をとどめるも
のは何ひとつなく、すでにそ
の名さえも殆んど消え去ろう
としている。（探訪記）

松島ストアは現在「スプリ
ング・ホーム」という現代風
のカフェになっている。銀行
や辻本玩具店は今は建物もな
く、町中の変化は山間地より
も激しい。

新道の南側に、「ハピネス・
タウン」という介護施設があ
る。以前に「新栄座」という
劇場があった場所で、今回、

その敷地内に墓石や
五輪塔が建っていた
のを見たことがある
という証言を得た。
庄源庵の痕跡だった
のかもしれない。介
護施設を建てたとき
に撤去されたのか、
墓石等を確認するこ
とはできなかった。

探訪記の周辺部紹
介で、庄源庵の近く

に直乗（じきじょう）
庵と称する庵寺があ
ったと書かれている
。「芭蕉の句碑がこ

こ店滝（直乗庵のあたり）の
庵寺の前にあったことから想
像すると、句座の会場はこの
庵寺ではなかったろうか。（探
訪記）

句碑を建てたのは田房（田
総とも書き現在の総領町）の
庄屋で越智（麦屋）吉左衛門。
麦屋は屋号で、酒造業も営ん
でいたという。蕉門の俳人で
「古声」、あるいは「桃甫」、「眠
亭」と号した。芭蕉百回忌（寛
政五年、一七九三）を記念して、
東城、庄原、田房などで句会
を催した。出張指導もしてい
たようで、その先々に句碑を
建てたという。

比婆郡誌には、直乗庵は金
福寺の前名であると明記され
ている。金福寺は中本町にあ
る日蓮宗の寺院で、句碑があっ
た場所からはかなり離れてい
る。他の庵寺か、直乗庵が移
転したのだろうか。

芭蕉の句碑は、スプリング・
ホーム（旧松島ストア）の石
垣の下にある古い井戸（下写
真）の東側にあったが、昭和
十二、三年頃、宝蔵寺に移っ
たと探訪記には書かれている。
その経緯は不明である。

東本町にある宝蔵寺を訪ね
た。句碑がある場所は、境内
にある江戸期の宝篋印塔（広
島県重要文化財）の前。「旅人

と我名呼ばれん初しぐれ」という流麗な文字がかるうじて読み取れる。側面には「文政六癸未年（一八二三）、「眠亭社中建立」と刻まれている。

宝篋印塔の解説板に書かれた宝蔵寺の縁起が、先月号で紹介した文献の内容とは少し違っていたのでここに記しておく。

「龍尾山密蔵院宝蔵寺（真言宗御室派）は古くは勝光山（庄原市川北町）にあったが、のちに現在地の北方の西城川対岸大仙谷（庄原市本町）の瀧尾山（たきのおやま）に移ったとされる。中世には山内氏の祈願所とされて寺領の寄進を受けるなどして栄えた。天正三（一五七五）年『山内元通坊主職預ケ状』（宝蔵寺蔵、市重文）には『瀧尾寺』とある。」

ご住職に確認すると、勝光山のそばの瀧尾山が起源で、その後、大仙谷の瀧尾山、同じく大仙谷の堂迫山と移転して、小保二年（一六四五）末寺上野寺跡に移ったのが現在地である。

古地図で見る瀧尾山は大仙谷の奥にあり、勝光山とはかなり離れている。大仙谷の地元の方に確認すると、瀧尾（たきのお）という地名にはなじみがあるが、瀧尾山は聞いたことがないという。書き写すときにサンズイが抜けてしまったのだろうか。地元の人でも、こうして名前はつきりしない山がかなり存在するようだ。

第三十二番札所 庄原西明寺

まよわずもみだをとなえて一筋に願えば西も明らかに見ゆ

（迷うことなく阿弥陀仏を一心に唱えて祈願すれば、西方浄土がはっきりと見えてきます。）

「御詠歌の額面は最近まで本堂入口正面に掲げられていたが、現在はずされていて、その所在が不明である。」（探訪記）

行寿山西明寺、浄土宗鎮西派。比婆郡誌には「本尊阿弥陀像は運慶の作と伝ふ」と書かれている。額面のことを確認したが、現在も不明。先代の住職は短歌にも造詣があった方のように、「どうして額面を外したんでしょうね」と話を聞いた家族の方も不思議がっていた。

「開基は天正十五年（一五八七）。住誉伝故という僧が西明寺の松の木に鐘をつるしたのを知った地区民が念

仏道場を建立したのが始まり。寛永二十年（一六四三）に石見銀山の西光寺から大誉上人を迎え、浄土宗寺院として開山した。承応三年（一六五四）には元山内家の家臣だった大坂屋三上弥三兵衛が本堂や鎮守の社、鐘楼などを寄進したが、延宝三年（一六七五）に火災が起き、本堂を残し全焼、その本堂も元禄年間（一六八八―一七〇三）に焼失した。再建は宝永三年（一七〇六）で、場所も現在地に移り、三上家が寄進した。以来、文化四年（一八〇七）に焼失、天保十三年（一八四二）再建、明治十七年（一八八四）に全焼と火災を繰り返した。」（中国新聞掲載、

県北の「社寺」による）

現在の本堂は明治二十二年、十六世の寂蒼上人が仮本堂として建てたもの。過去の大火での類焼を免れたという山門は風格がある。その前には六地藏の小堂。人は生前の行為の善悪によつて死後、「地獄、畜生、餓鬼、修羅、人、天」という六道の境涯を輪廻、転生するといわれるが、その境涯それぞれに、「檀陀、宝印、宝珠、持地、除蓋障、日光」の六地藏が衆生救済のために配されているという。山門の内側には、石仏が鎮座されている。印相を結んだ阿弥陀如来像。優しそうでなかなかのイケメンだ。こうして自分好みの石仏を探すのも、札所巡りの楽しみになっている。

庄原の大火といえば、「火村霊神」の伝説が有名だ。西明寺の近くにある合同庁舎の敷地の角に、祠が祀られている。その話は次号で。今回はいよいよ結願、三十三番札所の雲龍寺である。



◆◆◆どら書房ニュース◆◆◆

2月は在庫整理&店内改装のために休業します。

ただし、九日市の日には開店、店頭
の無人野菜販売コーナーも営業
します。

買取&引取の相談はお電話ください。
(☎090・9913・3052)

壺井栄『二十四の瞳』

——静かな反戦の訴え

『山びこ学校』の翌年1947年に壺井栄『二十四の瞳』（光文社、新潮文庫・他）が出版され、すぐに映画化されたこともあり、多くの国民が目には涙をためました。「二十四の瞳」とは、12人の子どもたちのことです。その健気な目と、その中から戦争で男3人が欠けた喪失感が描かれていたのです。

舞台は、瀬戸内海の穏やかな島の端っこの岬の分校です。女学校の師範科を卒業したばかりの「大石先生」は、島ではまだ珍しい自転車で颯爽とやってきて一、二年生を受け持ちます。

そんな様子を、童話作家でもあった壺井栄は、語りかけるように書き始めます。

「十年ひと昔というならば、この物語の発端は今からふた昔半もまえのことになる。世の中のできごとはいえ、選挙の規則があらたまって、普通選挙法というのが生まれ……」と、昭和3年（1928年）の時代相から始まり、物語は戦後の「今」に到ることを暗示します。

この間に、子どもたちの周辺にはいろいろな出来事が起こります。子どもの母親の出産死や、修学旅行に

気分が盛り上がるなかで、「男の子たちの半分以上が軍人志願」と嘆く大石先生は、アカ（非国民）の噂がたち、注意されたりもします。

教え子たちも5人が徴兵検査を受け、次々と戦地へ。大石先生の思いが差し挟まれます。

また読んでみたい本④7

青年たちに

音谷 健郎



【旺文社文庫版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第47回は、壺井栄の『二十四の瞳』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

行けない子、奉公に出される女の子……。大石先生が、子どものいたずらで足を傷めて療養し、小さな子どもたちが遠い道を歩いて見舞いに訪ねる場面は、前半のヤマ場です。

実際には、子どもたちの夢と現実がシビアに描かれていきます。好戦

「人はなんのために子をうみ、愛し、育てるのだろう。砲弾にうたれ、裂けてくだけて散る人の命というものを、惜しみ悲しみ止むることが、どうして、してはならないことなのだろう」

これは、戦前にプロレタリア作家

として、辛酸をなめた作家壺井栄が、戦後だからこそ吐けた、うめきのような言葉です。

後半は戦後。大石先生は、13年ぶりに教職に戻り、岬の小学校に赴任します。戦争に行つて若い者の殆どいない村。見るもの聞くものに涙します。貰った渾名は「泣きみそ先生」。かつての教え子たちが歓迎会をしてくれます。12人だったうち消息のついた女5人、男2人でした。そのひとり磯吉は、戦争で失明してしまいました。座興に回つてきた思い出の写真を手に取り、「まん中のこれが先生じやろ。その前にうらと竹一と仁太が並んどの……」と全員を指で押さえるのですが、少しずつズレているのでした。「そう、そうだわ」と相づちを打つ大石先生の頬に、「涙が走った」のでした。

経済企画庁が経済白書で「もはや戦後ではない」としたのが『二十四の瞳』が出る前年でした。ですが、この作品への強い共感、多くの人々の心の中に、戦後の経済成長より、大東亜戦争へのすつきりしないわだかまりが残っていた証拠です。

今回は、石原慎太郎『太陽の季節』を取りあげます。

虫と草木と人びとと ③⑤ 中村慎吾 「草花の博物誌——早春」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

シュンラン 花を塩漬にして香蘭茶に

三次市の名物に香蘭茶(こうらんちや)があります。お祝いの席でよく出されるお茶です。この香蘭茶は私たちがふだん飲んでいるお茶のよ

味は飲む人にこちよい安らぎを与えてくれます。

三次市で香蘭茶づくりがいつ頃かにはじまったか、はっきりしていません。今から約六十年前、河野駒一さんという方が香蘭茶の製法を開発し、河野さんが亡くなった後、その製法を三次長寿園の小田俊六さんが受け継ぎ、香蘭茶を名物として売り出し、京都のお菓子屋さんへも出荷しているそうです。京都のお菓子屋さんでは最中(もなか)にそえて売っているようで、おいしい最中を香蘭茶でというのはとても風流な



ことだと思えます。

シュンランの花や花茎を熱湯にとおし、食用にするという風習は昔からシュンランの咲く地方では広く見られたようです。しかし、塩漬にして祝いの席のお茶にするようになったのは、そう古いことではないようです。やがて、河野さんのように独自の方法を開発し、三次市の名物に仕立てたものと思われます。今は山が荒れ、シュンランも減り、香蘭茶づくりも大変になって来ていると小田さんは話しておられました。

シュンランは漢字で書くと春蘭、まだ、木の芽の眠っている春先、ど

ホトケノザ 仏様やぼさつ様がすわる蓮華台

一月、まだ冬の最中というのにホトケノザは茎を伸ばし花さえつけています。春を待ちきれず開いた花の上に白い雪をかぶることもあります。

のランより早く花をつけるところから名づけられました。日本で最初に作られた百科事典「和漢三才図絵」(わかんさんさいづえ、一七一二年)には春蘭と書いて「ほくり」と読ませています。ほくりとはほくろのこと、花びらのはん点を黒子(ほくろ)に見立て江戸時代ではほくり、ほくろと呼んでいたようで、今では漢名を音読みにしたシュンランが和名となり、ホクロはシュンランの別名とされています。

香蘭茶を飲む機会があったら春先がけてさくシュンランの花に思いをはせてみようではありませんか。

秋から、春の訪れを今か、今かと待っていたホトケノザにとって、日当たりのよい庭先や畑の土手などに小春日和の暖かい日が続く「さあ、待つ

ていた春だ」とばかり花をつけるの
かも知れません。

人間とちがって目も耳も鼻など全
く感覚器官をもっていない植物が季
節ごとに、どうして自分の花を咲か
せる季節を知ることができるのだろ
うかとてもふしぎでなりません。

ホトケノザとは仏の座という意味
です。仏像には蓮華台といって、仏
様やぼさつ様がすわるハスの花を
かたどった台座があります。ホトケ
ノザの茎をとりまいているまるい葉
とその間から見えているつぼみのよ
うすは、まるで蓮華台そっくりでは
ありませんか。そのようなことから
仏様の座ということで、ホトケノザ
と名づけられたようです。

セリ ナズナ ゴギョウ ハコベ



ラ ホトケノザ スズナ スズシロ

これは春の七草です。正月七日、
この七草を入れて「七草粥(かゆ)」
を作り、それを食べて一年の健康を
願うというのは日本の伝統行事のひ
とつです。

この春の七草の中にホトケノザが
ありますが、これは田んぼにはえて
いるキク科の植物「田平子(たびら
こ)」のことです。タビラコは冬、
葉を田んぼの地面にべったりとはり
つけ、バラの花びらが並んでいるよ
うな形になって、太陽のぬくもりを
葉いっぱい集めています。このよ
うすをやはり蓮華台に見たてて、タ
ビラコをホトケノザと呼ぶようにな
ったのかも知れません。

ホトケノザという名前を誰がつけ

たのか、わかりま
せん。むかしの人
は草花の姿をよく
見ていて「なるほ
ど」とうなずかせ
る名前をつけたも
のだと感心させら
れます。

老いの雑記帳 ②4

遊びの流儀

なかにし礼の「人生の教科書」
というエッセイ集を本屋で見付
け買って来た。その中に『本物
の「遊び」の流儀』というのがあつ
た。

文の冒頭は次のように書き出
している。『遊び』とはそもそ
も無駄な行為であって、金を無
理矢理使うことだ。自分の金を
使える余裕の中で本当のギリギ
リまで使うこと、それが楽しい
のだ』と。更に『ギャンブルやゲー
ムなどは「勝ち負け」の世界で
あり、遊びではない。「遊び」と
はもつと優雅で風流なものなの
だ。』とも言っている。『遊びと

は文化と接触し、そこに人間関
係がある。文化というものは体
験しなければ身に付かない。』
『遊びに見返りを求めてはいけな
い。見返りを求めた瞬間、「遊び」
は汚れてしまう。』、『野暮な奴は
遊んでいてもぼやく。「値段が高
い」とか、「料理がダメだ」とか
…これが野暮。自分の判断で
そこにいるのだから、文句を言
うなら自分に言うべきだ。』、縮
め括りの言葉は『遊んでいる過
程で、人はどうしても期待や落
胆などさまざまな思いを抱くも
のだ。それを押し隠し、どう我
慢し、どうやって一人の人間と
して振る舞うか。それが「遊び」
の本物の流儀なのだ。』と結んで
いる。

引用した文が多過ぎて私自身
のコメントが書けないのが残念
だが、「遊び」を無駄や怠惰だと
考えている人達は、これから先
も無味乾燥な無意味な人生を送
ればいいのだ。

「続・思いのままに〜我が心の雑
記帳〜」(鈴木澄夫著)より



土から顔を覗かせている楕円状の蕾を、振じ切るように摘み取って、笹（ざる）の中に放り込む。山積みされたフキノトウに苦笑を浮かべた。誰がこんなに食べるんだ？ フキ味噌にでもして保存するしかないか。

フキノトウの天ぷらは、ガンちゃんの好物だった。本当は寛太という名前なのだが、身体が岩のように大きくて頑丈なので、みんなからガンちゃんと呼ばれていた。無口で不愛想、そして無類の食いしん坊だ。

食い意地のエピソードには事欠かない。都会で育ったのか、田舎暮らしや自然のことを、まるで知らないのだ。

川辺で釣りをしていて、うなぎを捕まえたというからバケツの中を覗いたら、黒っぽいヘビがとぐるを巻いている。ヘビだと言ったら、へへと笑っていた。確信犯だ。何かの本で、ヘビはおいしいと書いてあるのを覚えていて、本当に丸焼きにして蒲焼のタレをつけて食べてしまった。都会育ちの野生児だ。

リングは皮ごと丸齧りで、芯や種までガリガリと噛み砕く。残すのはヘタの部分だけだ。

珍しく寝込んでいると思ったら、

ニラと間違えてスズランの葉を食べている。「あんた、死ぬよ」と言って救急車を呼ぼうとすると、もう吐いたし下痢ぴーで全部出したから大丈夫だと言いつ張る。あまりの剣幕に、しばらく様子をみることにしたら、夕食にはべろりと鍋いっぱいのおかゆを平らげた。

極めつけはベニテングダケだ。きれいなので家に持って帰って飾って

を出したのかもしれない。今度やったら警察を呼ぶよと、灸を据えた。

「何か食べさせてもらえませんか？」そう言つて、ガンちゃんはいきなり軒先に現れたのだ。いかつい風貌に警戒した。七十近い婆さんだが、女の独り暮らしだ。断ろうと思ったら、おなかの虫が悲鳴のような声で哭いた。泣き笑いの顔がひどく幼く見えた。

れんげ草

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子④1

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

いたら、どんな味がするのだろうか？ 気になって、コンロで素焼きして少し齧ってみたのだという。意外とおいしい。しばらく時間を置いても、気分が悪くなったりしないので、一本丸ごと食べてしまったそうだ。

事後申告で、表情が緩んでいつもよりは遥かにおしゃべりだ。子どもの頃はグレていたと聞いたことがあるから、シンナーでもやる感覚で手

ンちゃんは塚本家の居候になった。

お礼に農作業を手伝うのだが、がさつで不器用、物覚えも悪い。しかし、体力だけは人一倍ある。それだけで十分だった。年寄りばかりの山里では、いちばんの宝物だ。

「見ているだけで寿命が延びる」旺盛な食欲も宝物だ。あちこちから農作業の手伝いの声がかかるようになって、ガンちゃんは人気者になった。

「ちゃんとこの住人になって、ずっと一緒にいてくれんかの」

半年を過ぎた頃に、塚本のじいさんが頼んだことがあるのだが、ガンちゃんは下を向いたまま無言だった。塚本さんはガンちゃんのことを、周囲には遠縁の者だと説明していた。

漬物とみそ汁だけで、どんぶり飯を五杯、平らげた。ご飯が足りなくて、事情を話して隣の塚本さんにわけてもらったら、おもしろがって夫婦で見学に来た。

「これからどうすんの？」塚本のじいさんに訊かれて、何もアテはないですと頭をぼりぼり掻いた。宿なし、金なしの風来坊……、今ではホームレスと言うのかな。ガ

武彦の命日の日だった。いつもは安田さんと二人で墓参りをするのだが、ガンちゃんも一緒に来てくれた。塚本のじいさんが脑梗塞で倒れて入院、奥さんも娘夫婦の所に身を寄せられているので、ガンちゃんは家を守る形で一人で暮らしていた。

「憎くはないの？」不躰な物言いにカチンときた。「安田さんはちゃんと罪をつぐのうておる。こうして毎年、武彦の命日



には墓参りに来てくれる。ありがたいことだと思ふとるよ」

本心ではなかった。今でも、武彦をかえせと心の中で叫んでいる。あの男が居眠り運転さえしなければ……。

「かあちゃんは、えらいな……」
ぼそりと言って、部屋を出て行った。集落からガンちゃんの姿が消えた。

数日後に警察から電話がかかってきた。ガンちゃん……、中堀寛太が自首して来たという。三年前の殺人

事件の犯人だった。

一度だけ刑務所に面会に行ったことがある。

「どうして自首する気になったん？」
確かめておきたかった。

「悪いやつだから、死んでも自業自得だと思っていた……」

振り込め詐欺の首謀者で、ガンちゃんの知り合いのばあさんが金を騙し取られたので、それを取り戻そうとしてトラブルになった。ナイフで脅かされて、揉みあっているうちに刺してしまった。

「でも、そんなやつにも家族がいる。悲しんでいる人がいる……」

やっぱりわたしのせいなのだ。あのとき本音をしゃべっていたら、ガンちゃんはお出でいかなかったかもしれない。理不尽だとはわかっていても、そんなことを考えてしまう。

(待っているから……)

今回も本心を言うことはできなかった。あんな年寄りばかりの山奥に来てもらっても、楽しいことは何もないだろう。

田んぼの一面を、れんげ草の緑が覆っている。緑肥にするために種を蒔いているのだが、春になると可憐な花をつけて一面の花畑となる。そ

のとき耕運機で土中に鋤き込むのだが、「もう少し咲かしておいてやりてえな」、ガンちゃんがぼそりと呟いた。ヘビを丸齧りする男に、こんな繊細な一面があることに驚いた。(今年で最後かもしれない)

来月には苗床の準備をしなくてはならない。もう歳だ。あちこちガタがきている。

(うん?)

人影が見えた。田んぼの畦道を歩いて、どんどん近づいて来る。墨染の法衣を身にまとい、網代笠をかぶった雲水であることがわかった。

わたしの前で立ち止まって、笠を外した。

「お久しぶりです」

坊主頭のガンちゃんだった。嘩然として声の出ないわたしに、穏やかな笑みを浮かべた。

「何か食べさせてもらえませんか？」

笑ってうなずいて、フキノトウの入った笹を抱えた。

「永平寺で一年間、修行したんで、山楽寺で雇ってくれないかと頼んだら、断られました」

「だって、あそは真宗さん……」

呆れてそう言いかけて、へへへと笑っている顔に気づいた。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日 ※2月は店内整理で全休
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から) ※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「塩の街」

有川浩 著 角川文庫

アリカワヒロと読む。以前に女性だということを知って驚いたが、本書を読んで驚きが倍加した。電撃小説大賞受賞のデビュー作。塩が世界を埋め尽くす塩害の時代。人間も例外ではなく、塩化されて崩壊する。ハードSFの世界で、描かれているのは塩の結晶のようなキラキラした男女の純愛。リテールがしっかりしているので、わたしのようなおじさんでも過不足なく感傷に浸ることができた。



本書は、その後の物語も、全体を解明するエンディングの物語も併載されている。SFは中途半端に説明すると陳腐になる、そんな障壁も楽々とクリア、この作家の小説力は確かである。自衛隊3部作の1つ。

「抄訳版 アメリカの鏡・日本」

ヘレン・ミアーズ 著 角川新書

「日本はなぜ、あんな無謀な戦争を起こしたのか?」、我々「戦争を知らない」世代の素朴な疑問に答えてくれる「公平」な本にようやく出会えた。著者は東洋学の研究者で、戦後日本の労働基本法の策定にも携わっている。

明治維新で産声を上げたばかりの近代日本が、妄信的に西欧列強の政策を模倣、米英も自国の権益のために後押しした。しかし、日本が力をつけ過ぎたために叩き潰された。もはや抵抗する戦力はないことがわかっていて、懲罰的に本土を空襲、蹂躪した。1948年アメリカで出版。マッカーサーが日本での翻訳出版を禁じた「衝撃の書」、日韓問題の原点も記述されている。



「アムステルダムの詭計」

原進一 著 原書房

第8回ばらのまち福山ミステリー文学新人賞受賞作。読んでみようと思ったのは作者の経歴。1948年生まれだから、受賞時は67歳。色眼鏡で読み始めたが、期待以上の重厚な語り口にたちまち引き込まれた。

松本清張の「アムステルダム運河殺人事件」が下敷き。ジュラルミン製のトランクに入った胴体だけの日本人の死体が発見されたのだ。この



実在の事件に、フェルメールの贋作という絵画の闇を絡めてストーリーを構築。商社マンだった経験を活かして、設定はリアルである。エンディングの一文には「うまいなあ」と思わずうなった。全共闘世代のニヒリズムを感じる。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇&歌壇

明け六つの鐘をうつつに冬の旅

竹地 恵美

誓子句碑総身に冬の苔纏ひ

冨久光

亡き人をふと想いつつ雑煮食う

片岡 正人

大吉を強く結びて初詣

隆愚

人住まぬ家となりても注連飾る

大槇 三代子

寒き朝武者震いして起立する

赤川 冬人

幼子の眼の輝きて新春の宮

松岡 初枝

なにを願ふや小さき手合わす

投稿&寄稿

「ドラ猫物語・終章」

赤川 仁洋

オトツチャンが死んだ。昨年のも月号で「庄原・中本町ドラ猫物語」で紹介した虎猫のことである。

もともとは、中本町界限を徘徊していた野良猫で、でかい顔と短い尻

※参加を歓迎します。



本町で造園業を営む伊尾さん宅にもぐりこんだ。押しかけ飼い猫である。その風貌から、オトツチャンという名前をもらった。

飼い猫になったオトツチャンの身体に異変が起きた。よだれを垂れ流して、口臭がひどい。動物病院で診察してもらおうと、歯茎が腫んで口内炎を起こしていた。放置しておくとう痛みで水も飲めなくなつて、衰弱死が待っている。

奥歯を全摘する手術を受けて復活、ガリガリに痩せていた体もふつくらして、伊尾さん宅の前にある銀行の駐車場で日向ぼっこをしている姿をよく見かけた。人懐っこくてすり寄ってくるので、「猫の支店長」と呼ばれて人気者になった。二か月ほど前に、再びオトツチャ

ンに異変が起きた。食いしん坊の猫が、急に餌を食べなくなった。そのくせ、水をがぶ飲みする。動物病院での診断は重い腎臓病、猫エイズにも罹っていた。人間ならば人工透析だが、動物は点滴をして血液中の毒素を薄めるぐらいしか方法はない。週二回の点滴に耐えていたが、年が明ける前に力尽きた。

亡くなる一週間ほど前に、飼い主に抱かれてわたしの店に遊びに来た。石油ストーブの暖かさが気に入ったのか、そばを離れようとしな。飼い主に抱かれて帰ったが、それから二回も舞い戻って来た。暖房のよく効いたこの方が生き残るチャンスは大きいと判断したか。背中を撫でると、ゴツゴツした背骨がじかに触れた。二度目は店に入れないでそのまま消灯、朝になると姿を消していた。

翌週、四肢を伸ばして硬直したオトツチャンと再会、その格好で家中で死んでいたという。最後まで逞しく生きた。その生命力には感嘆、内心、あやかりたいと願っている。これでドラ猫物語は終了……、実は半月ほど前から、尻尾の短い若いオス猫が、近所をうろついているのである。

郷土の本棚⑨ (文責・赤川仁洋)

「零の軌跡」Track of Zero」野田誠 著

前衛俳句の旗手として活躍した野

田誠の散文集。昭和四年、比婆郡庄原村(現庄原市)の生まれ。巻末の「跋にかえて」で、俳句に対する考えと、「零」というタイトルに対する思い入れが書かれている。

散文は如何に表現しようかと努め、俳句は如何に表現すまいかと努める。書かないということは書けないことを意味しない。書かないためには明確な思想と峻烈な批評と、豊饒なるポエジイを最低条件とせねばならぬ。

(中略)

もう一度。俳句は常にゼロを夢見る。表現すまいとする表現意志を信ぜよ。もともと常識への嫌悪と侮蔑が詩人のパッションであった。

自分流に解釈すると、常識や作為を捨てて、自分の直感を信じて句作しろという意味か。零に近づくほど、可能性は無限大になる。

戦争で価値観が破壊された戦後に、前衛俳句の熾火は燃え上がった。しかし、同じ前衛芸術で

ある抽象画が色彩というわかりやすさで市民権を得たのに比べて、「無意味な言葉」の前衛俳句は難解で、次第に支持を狭めて行く。それを承知で、自己の芸術性に殉じたとも言える。野田誠の実質的な処女句集のタイトル

は「敗走」、敗れる者の美学を吟じている。

ひろしまや蝌蚪には深き地の窪み
おさらばの地球の裏の軽気球
蝌蚪(かど)はオタマジャクシのこと。このあたりはまだ理解できる。

夕日まみれの乳房かかへた綱渡り
血みどろの斧となりかの天に揺れ
わが諸悪死後さんぜんと寒の雨

前衛俳句の前身である戦前の新興俳句の雄、西東三鬼の句に親しんだわたしも、感覚でしか受容できない。感性の精度が試されている。

本書には、ストイックな俳句論やシニカルな評論だけではなく、旅行記や俳句仲間との交遊録も収載されている。これが実に魅力的なのだ。

旅をするときは——これはどこかでだれかに教わった知恵だったかもしれないが、乗り物では、その土地の老人を見つけて、隣に腰掛けることにしている。たいてい失望することはない。

旅はいいものである。そこでは思いがけない「昔」にめぐり逢うことができるのである。名所旧跡があるからばかりではない。風景が昔を語りかけるだけではない。旅には昔が

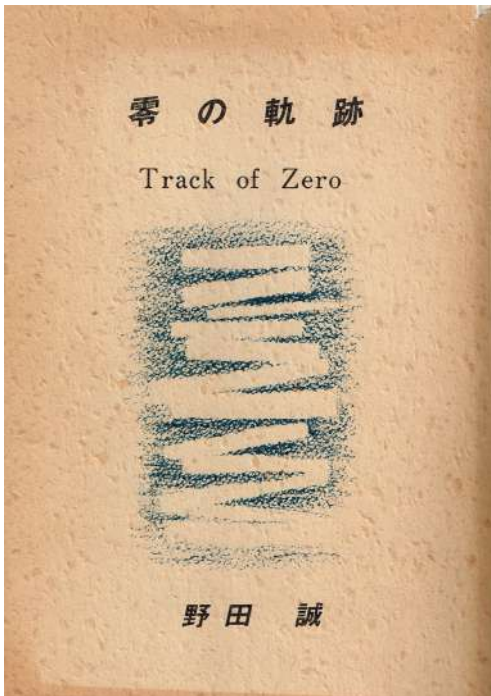
残っている。

おまえは嘘つきだと叱られて僕は正直になった記憶がない。おまえは正直だと云われたら、もうその人は決して騙せないのである。

「野田君は真正面から胸倉を殴りつけてくる。だから今はまだ野田君が怖くない。だってそのふりかざしている斧は、僕の斧と同じなんだ。僕の胸を割ることはそれほどたくさんはない。ところが鎌田矩夫にはときどき閉口する。彼は僕の背後にまわって、腋の下を撥(くすぐ)るからね」

これは富沢赤黄男の言葉。前衛俳句の同人誌「俳句評論」を創刊した高柳重信の師匠である。野田は高柳に師事して、「俳句評論」の創刊に参画、戦後俳句史に名前を刻んでいる。

郷里の庄原での活動については、野田の古くからの俳句仲間である近藤昌平さんが詳しい。本誌の俳壇の創設者である近藤さんは、現在は体調を崩しているので、面会を自粛している。どらくる俳壇復帰と、野田誠のエピソードが聞ける日がくることを願っている。



どらくろあ ホームページ



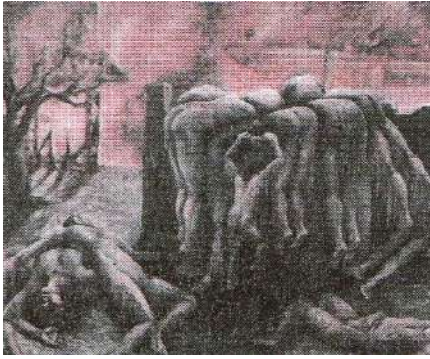
バックナンバーも掲載している
ので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。

<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

《先月号の訂正》

- ・特別寄稿「長崎にも行った頼杏坪」において、4段7行目からの文章は、「長久保赤水は庄屋を務めていた旧家に生まれ、村に身を置きながら水戸藩の学風を真面目に学び」となります。
- ・掲示板の「どら書房無人野菜販売コーナー」の「毎週火曜日の朝」は「毎週水曜日の朝」、「青森県産ホワイトニンニク6片使用」は「青森産ニンニクホワイト六片使用」です。

初期配布の冊子は訂正されておりません。
謹んでお詫び申し上げます。



三次市出身 岡本実佳枝さんの作品

2020 原爆展 in 庄原

- ・パネル写真「ヒロシマ・ナガサキ 原爆と人間」
- ・基町高等学校生徒と被爆体験証言者との共同制作による「原爆の絵」

日程：2月17日(月)～21日(金)

展示場所：庄原市役所ロビー

主催：新日本婦人の会 県北支部

東日本大震災復興祈願法要 shizuku LIVE

日時：2月29日(土)

場所：萬福寺(庄原市是松町227)

TEL:0824-72-0292

※入場無料(会場に募金箱を設置しています)

- スケジュール -

12:00 カレー「キナリ」

チーズ「ふくふく牧場」

「ハンドメイド☆Kei」

喫茶「萬福寺」

14:00 坐禅と法要

15:00 shizuku LIVE



shizuku(プロフィール)：

大山百合香(唄、三線)と在日コリアン三世のカヤグム奏者 sangmi(サンミ)からなるユニット

編集後記

◇巻頭の「ふるさとの巡礼地を訪ねて」、今回が最終回の予定でしたが、記載する内容が増えてしまい、次号に延ばします。現地取材したときに文献との齟齬もあって、しっかり書き残しておくべきだと思いましたが、新たな情報やご教示もお願いいたします。

◇先月号で、校正ミスがかなりありましたが、「掲示板」で訂正してあります。最後まで気を抜かないで編集するべし、ですね。今後の教訓いたします。

◇在庫整理&店内改装のために、二月いっぱい休業します(九日市の日は開店)。やるべきことがたくさんあって、あつという間に時間がなくなりそうです(苦笑)。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail: touzin@sannet.ne.jp

年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン：ROUTE183

協賛：九日市愛好会

第 229 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和 2 年 2 月 9 日 (日) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間(440年前)に物々交換で始まった市(いち)

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

庄原子ども美術館絵画教室作品展

とき：2月8日～9日 10時～15時

★どら書房 →休憩所あります！！

2月は、在庫整理の為、休業中です。

但し、九日市の日は営業します。

★楽笑座で「まかない食堂」開催！！

10:30～12:00 そば 1杯 600円

★楽笑座で「うた声喫茶」開催！！

13:30～15:00 参加料500円

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子200円！

出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】 コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

